

タイ語読解上の諸問題

——タイ語中級者に焦点をあてて——

加納 寛

บทคัดย่อ

งานวิจัยฉบับนี้มุ่งศึกษาปัญหาด้านการอ่านและการเข้าใจประโยคภาษาไทย สำหรับ นักศึกษาญี่ปุ่นที่เรียนภาษาไทยมาแล้ว 1 ปี รวมทั้งหาวิธีแก้ไขการอ่านและความเข้าใจ ประโยคภาษาไทยให้ถูกต้อง

นักศึกษาญี่ปุ่นมักมีปัญหาด้านการอ่านเว้นคำวลี อนุประโยค และ ประโยค ไม่ถูกต้อง เพราะภาษาไทยไม่มีการเว้นระยะระหว่างคำ เมื่อเว้นวรรคผิด โดยเฉพาะอย่างยิ่งการเว้นคำผิดที่ ก็จะเป็นปัญหาที่ทำให้เข้าใจความหมายของประโยคผิดพลาดไปด้วย ปัญหาการอ่านวรรคตอนไม่ถูกต้องนี้เป็นผลเนื่องมาจาก (๑) การขาดความรู้ด้าน คำศัพท์ (๒) การขาดความรู้ด้านไวยากรณ์ และ (๓) การขาดการพิจารณาเนื้อความ ของประโยค การขาดการพิจารณาเนื้อความของประโยคเป็นสาเหตุสำคัญที่สุด เพราะ ถ้าพิจารณาเนื้อความได้ถูกต้อง ก็จะทำให้เข้าใจทั้งคำศัพท์และไวยากรณ์มากขึ้น

นักศึกษาญี่ปุ่นมักจะมีปัญหาด้านการพิจารณาเนื้อความของประโยคเกี่ยวกับ (๑) พระมหากษัตริย์ (๒) ศาสนา และ (๓) การทหาร เพราะประเด็นความรู้เกี่ยวกับสถาบัน ทั้งสามนี้ นักศึกษาญี่ปุ่นส่วนมากไม่ให้ความสนใจ ไม่มีการศึกษาทั้งจากทางบ้านและ ทางโรงเรียน หรืออาจกล่าวได้ว่า ถ้าผู้ใดมีความรู้ในด้านเหล่านี้ก็จะถูกมองว่าเป็นคน ผิดปกติในสังคมญี่ปุ่น ในขณะที่โดยข้อเท็จจริง ความรู้เหล่านี้มีความสำคัญต่อการอ่าน และรับรู้ข่าวสาร จากหนังสือพิมพ์ นิตยสาร ตลอดจนหนังสือแบบเรียน และ หนังสือ เกี่ยวกับ ประวัติศาสตร์ วัฒนธรรม และสังคมไทย

นักศึกษาที่ต้องการศึกษาภาษาไทย วัฒนธรรม และ สังคมไทยอย่างลุ่มลึก จึง ควรต้องศึกษาหาความรู้ในเรื่องราวของสถาบันทั้งสามดังกล่าว เป็นพื้นฐานสำคัญ ซึ่งจะ เอื้อเพื่อให้สามารถรับรู้เข้าใจเนื้อความของประโยคได้ และจะทำให้การอ่านการศึกษา ภาษาไทยมีความราบรื่นและประสบความสำเร็จยิ่ง ๆ ขึ้น

はじめに

言語の習得は、通常何らかの目的を伴う。言い換えれば、多くの場合、言語の習得は、何らかの目的に対する手段である。言語学習者は、学習途上で身に付ける文法知識や語彙力を駆使して、それぞれの目的を果たすことになる。それぞれの目的は、たとえば当該言語話者との親交を深めることにあったり、当該言語使用地域の理解にあったり、当該地域との政治的・経済的・文化的関係を維持・発展させることにあったりするわけであるが、そうした行為は、音声言語であれ文字言語であれ、テキストの受信および発信によって成立していく。

本稿では、タイ語学習者が一般的文法および語彙を習得し、テキストを受信もしくは発信する段階に達した際に直面する問題点を、とくに誤解が頻出するタイ文読解に焦点を当てて観察・整理し、頻出する誤読を避けるための一般的対策を提示していきたい¹⁾。

観察の対象は、筆者の担当する愛知大学国際コミュニケーション学部比較文化学科「総合タイ語Ⅰ」および「総合タイ語Ⅱ」の履修者である。両講義は、すでに1年間タイ語を学習した第2学年学生を対象としており、本2001年度で4年目を迎える国際コミュニケーション学部において実施期間3年を経過した。

受講者数は、每期10名前後である。彼らは、すでに筆者および一宮講師による「基礎タイ語」Ⅰ～Ⅵを受講し、基礎的なタイ語文法と語彙を習得している。

「総合タイ語Ⅰ～Ⅱ」では、その基礎を踏まえた上で、一般的書類の読解・記述、書簡の読解・記述、地理案内の聴解・発信、ニュースの読解・聴解、短文・小説等の読解・記述などを中心に、タイ語の実地的応用を学んでいく。

その際、もっとも多種の誤解が生じるのは、タイ文の読解においてである。以下、日本人学習者の実際の誤答例を中心に、まず語彙力・文法的知識とその応用から生じる誤解を、次いで基礎知識・常識の欠如から生じる誤解を観察し、そうした誤解に陥らないための一般的対策について考えていく。

1 語彙力・文法的知識とその応用

(1) 単語の区切り

タイ文読解において、語彙力および文法的知識を活用することは重要である。

タイ語では、欧米言語のような単語の分かち書きをしないため、語彙力については、まず文字の羅列のうちから単語間の区切りを正確に読み取る場合に必要である。たとえば、例1と例2は、1つの語を2語であると誤解したことによる誤りである。例1の「文化」はタイ語学習者にとって基本的語彙であり、基礎的な語彙力があれば誤答を避けられたはずである。例2の「コウモリ」は基本的語彙とはいえないが、文法的位置付けを正確に読み取ることに

よってこの単語が名詞であること、「匹」という動物を数える類別詞を認識することによってこの語が動物の名称であることを読み取ることができれば、辞書を調べることによって正解が可能となる。例3は、「アジア」という語を複数に分割して解釈してしまった例である。発音や文脈から判断して、正確に意味を読み取ることは可能であったはずである。単語の区切りを誤解すると、とんでもない訳語をアクロバティックに組み合わせなければならなくなり、むしろ正解より誤答を生み出すことのほうが困難に思えるほどの難解釈となってしまうので、語彙力を高め、また文法的位置を熟考し、文脈を読み取って、単語の区切りを誤らないよう細心の注意を払わなければならない。

例1 วัฒนธรรม

誤答：/wátthaná/ /tham/

〈繁栄〉〈仏法〉→ 仏法の繁栄

正答：/wátthanátham/

〈文化〉

例2 ค้างคาวจำนวนนับแสนตัว²⁾

誤答：/kháng/ /khaao/ /camnuan/ /náp/ /sěen/ /tua/

〈停まる〉〈生臭い匂い〉〈数量〉〈数える〉〈10万〉〈匹〉

→ 10万匹を数える生臭い匂いが残る

正答：/khángkhaao/ /camnuan/ /náp/ /sěen/ /tua/

〈コウモリ〉〈数量〉〈数える〉〈10万〉〈匹〉

→ 10万匹のコウモリ

例3 เอเซียตะวันออกไกล

誤答：/ee/ /chia/ /tawan/ /òok/ /klai/

〈あれ?〉〈拝礼する〉〈太陽〉〈出る〉〈遠く〉→ あれ? 遠くに出る太陽を拝む。

正答：/eechia/ /tawan òok/ /klai/

〈アジア〉〈東〉〈遠い〉→ 極東アジア

固有名詞を単語群であると誤解して逐語訳してしまう例も多く見られる。とくに日本人には長く感じられる国王・王族名(例4, 5)や、近代以前の官等名・欽賜名³⁾(例6)、外国人の地名や人名(例7, 8)は誤答を招きやすい。学習者は、解釈に無理を感じながらも、とりあえず答えを出すために無理やり単語の意味を並べて訳らしいものを作り上げてしまう。固有名詞の前後に並ぶ語彙を正確に読み取ることにより固有名詞の出現を推測する能力や、

固有名詞の範囲を特定する能力を身につけること、また読解に必要な常識をわきまえておくことが必要である。たとえば、例7では、「から」「まで」という前置詞と「市」という語に着目すれば、「市」という語の直後に地名が入ることは推測できるはずである。また、例8では、「大統領」と「ブッシュ」が読み取れれば、その間にはファースト・ネームやミドル・ネームが入ることは常識として推測できる。むしろ誤答例にあるように「ダブリュー」の一部を「消す」と考える方がよほど難解である。解釈に無理があると思ったら、安易に辞典の訳語に飛びつくのではなく、そこでしっかりと考えてみることが重要である。

例4 พระบาทสมเด็จพระเจ้าอยู่หัวภูมิพลอดุลยเดชมหาราช

誤答：/phrábàat/ /sòm/ /dèt/ /phrácào/ /yùu/ /hùu/ /phuum/ /phon/ /adun/ /dèt/ /mahàarâat/

〈仏足石〉〈ふさわしい〉〈切断する〉〈神〉〈いる〉〈頭〉〈土地〉〈力〉〈無比の〉〈威力〉〈大王〉

→ 大王の威力の無比の力の土地の端にいる神を切るにふさわしい仏足石

正答：/phrábàat/ /sòm-dèt/ /phrácào/ /yùu/ /hùu/ /phuumíphon adunlayadèt/ /mahàarâat/

〈陛下〉〈陛下〉〈王〉〈いる〉〈頭〉〈プーミポンアドウンラヤデート〉〈大王〉

→ プーミポン国王陛下

例5 สมัยพระเจ้าตากสินมหาราช

誤答：/samăi/ /phrácào/ /tâak/ /sîn/ /mahàarâat/

〈時代〉〈神〉〈干す〉〈財〉〈大王〉 → 大王の資産をさらした神代の時代

正答：/samăi/ /phrácào tâaksîn mahàarâat/

〈時代〉〈タクシン大王〉 → タクシン大王の時代

例6 เจ้าพระยาพระคลัง

誤答：/câophrayaa/ /phrákhlang/

〈チャオプラヤー (川の名?)〉〈王庫〉 → 王室の財庫のチャオプラヤー川

正答：/câophrayaa/ /phrákhlang/

〈チャオプラヤー (官等名)〉〈プラ克蘭 (欽賜名)〉

→ チャオプラヤー・プラ克蘭 (官等・欽賜名)

例7 จากเมืองฟิลาเดลเฟีย ไปเมืองซีแอตเติล

誤答：/câak/ /mưang/ /fi/ /laa/ /deenfia/ /pai/ /mưang/ /sí/ /èttòon/

〈〜から〉〈市〉〈?〉〈別れを告げる〉〈?〉〈行く〉〈市〉〈(命令の終助詞)〉〈?〉

→ フィの町からデーニアに別れを告げて、町に行け、セータルよ。

正答：/càak/ /mưang filaadeenfi/ /pai/ /mưang sícèttàøn/
 〈～から〉〈フィラデルフィア市〉〈行く〉〈シアトル市〉
 → フィラデルフィアからシアトルまで

例8 ประธานาธิบดี จอร์จ ดับเบิลยู บุช

誤答：/prathaanaathiboodii/ /còot/ /dàp/ /bænyuu/ /bùt/
 〈大統領〉〈?〉〈消す〉〈?〉〈ブッシュ〉
 → 大統領は（不明）を消してブッシュ

正答：/prathaanaathiboodii/ /còot/ /dàpbænyuu/ /bùt/
 〈大統領〉〈ジョージ〉〈ダブリュー〉〈ブッシュ〉
 → ジョージ・ダブリュー・ブッシュ大統領

(2) 語義の確定

さて、単語の区切りを正確に読み取ったら、次には単語の意味を確定しなければならない。一語に対して複数の訳語がある場合には、注意しなければならない。たとえば例9は、「種」を「家系」と誤解したために、文意が少しずれてしまった例である。例10は、慣用句「いずれにしても」を直訳してしまったものである。ただし、単純な訳語の誤りでは、単語の区切りは誤っていないため、文意の解釈可能幅はかなり狭くなり、極端な誤訳は出現しにくくなっている。

例9 รักษาพันธุ์สัตว์ป่า

/ráksáa/ /phan/ /sàt/ /pàa/

誤答：〈守る〉〈家系〉〈動物〉〈森林〉→ 野生動物の家族の世話をする。

正答：〈守る〉〈種〉〈動物〉〈森林〉→ 野生動物（の種）を保護する。

例10 อย่างไรก็ตาม

/yàangrai/ /kòo/ /taam/

〈どのような〉〈も〉〈従う〉

誤答：→ どのようなであっても従うが、

正答：→ いずれにしても、

また、単語の意味を調べても、その単語を節や文に統合できない場合も頻出する。そうした場合に、文法も文脈も無視して、解釈のつかないままに無理やり単語をつないで日本語として意味が通じない訳文を提出することもある。これは、特に宿題や試験のような場合に頻

繁に観察される。たしかに受験技術としては、わからないながらも単語を羅列しておいた方が、白紙で提出するよりはよいかもかもしれない。しかし、主体的な学習においては、その単語の羅列でその文が理解できたかのように自分を欺かないことが必要である。自分を欺き、あるいは不明であった点を曖昧にする癖をつけると、卒業研究等において解答の用意されていないタイ文読解に直面しても、理解できないまま、いい加減に処理してしまうようになり、重要な史資料の価値を無にってしまうことになる。企業や政府等の業務であれば、深刻な誤解を生じてトラブルの基になってしまうかもしれない。たとえば、例11は、「～まで」という句を単語レベルに分解して直訳してしまった例であるが、スコタイ時代は14世紀には終息に向かい、ラーマ3世期は19世紀の後半であるから、誤答例は不自然であることがわかる。例12は、修飾節内の動詞を主節の動詞と誤認してしまったために、実際には名詞句である部分を文として捉えてしまったものである。関係代名詞的用法で用いられる“ที่/thii/”が省略される場合に、こうした誤認が生じやすい。前後の文脈を見回して無理が生じてないかどうか観察することにより、こうした誤認を防ぐようにしなければならない。

例11 สมัยสุโขทัยมาจนกระทั่งถึงสมัยรัชกาลที่ 3 แห่งรัตนโกสินทร์

誤答：/samăi/ /sùkhòothai/ /maa/ /con/ /krathâng/ /thǔng/ /samăi/ /rátchakaan thii sâam/ /hèng/ /ráttânákoosin/

〈時代〉〈スコタイ〉〈来る〉〈詰まる〉〈ぶちあたる〉〈～まで〉〈時代〉〈ラーマ3世〉〈～の〉〈ラタナコーシン朝〉

→ スコタイ時代は、ラタナコーシン朝ラーマ3世の治世の時期まで来て行き詰った。

正答：/samăi/ /sùkhòothai/ /maa/ /con krathâng thǔng/ /samăi/ /rátchakaan thii sâam/ /hèng/ /ráttânákoosin/

〈時代〉〈スコタイ〉〈来る〉〈～まで〉〈時代〉〈ラーマ3世〉〈～の〉〈ラタナコーシン朝〉

→ スコタイ時代からバンコク朝ラーマ3世の時代にいたるまで

例12 ลัทธิแสวงหาเมืองขึ้น

/látthi/ /sawǎeng hâa/ /mư̄ang khư̄n/

〈教義〉〈探す〉〈属国〉

誤答：→ 教義は属国を探す

正答：→ 植民地（獲得）主義

逆に、語彙力と文法知識の応用により、原文の誤字・脱字を発見し修復することも可能に

なる。たとえば、例13は、文字通り「やかん (กาน/kaa/)」として解釈しても意味は自然なものとはならず、むしろ「事」を示す語 “การ/kaan/” の末子音が欠落していると考えたと自然に解釈できるため、脱字の可能性が高いことが推測できる。

例13 อุทยานที่ได้รับรางวัลในการจัดการดีเด่น⁴⁾

誤答：/útthayaan/ /thii/ /dâiráp/ /raangwan/ /nai/ /kaa/ /càtkaan/ /diidèen/

〈公園〉〈～であるところの〉〈受け取った〉〈賞〉〈～の中〉〈やかん〉〈処理する〉
〈よく〉

→ よく処理したやかんの中に入った褒美を受け取った公園

正答：/útthayaan/ /thii/ /dâiráp/ /raangwan/ /nai/ /kaan/ /càtkaan/ /diidèen/

〈公園〉〈～であるところの〉〈受け取った〉〈賞〉〈～の中〉〈管理(すること)〉〈よい〉

→ 優秀な管理によって受賞した公園

(3) 節・文の区切り

タイ文においては句点に該当する記号を使用せず、一般には節や文の間のスペースによって節や文の境界を表現する⁵⁾。そのため、文意を正確に理解するには、節や文の区切りを適切に把握する必要がある。区切りを把握したら、スペースに囲まれた節や文、場合によっては句が、どのように関連しあっているかを考えなければならない。とくに注意を要するのは、スペースに囲まれた従属節が、その前後のどちらの主節に連携しているかを考えることである。これは、場合によっては文法的知識だけでは解決できない。論理的構成力および常識が必要となる。たとえば、例14は、「絵画コンクール」を修飾する「僕は木が大好きだ」という節を、独立の文であると誤認したことによる誤りである。「僕は木が大好きだ」を単独の文として捉えると、明らかに前後との脈絡が合致せず文意が理解できないので誤りに気がつきそうなものである。例15は、「なぜなら」で始まる理由を述べた従属節を挟んで、前後に2つの文がある。この部分を解釈する際には、この節を、どちらの文に接続させればよいか、考えなければならない。誤答例は後の文に接続するものとみなしているが、一見しても不自然には見えない。しかし、理由を示す従属節の主語となる「日本語ができる者」は、後の文の主語「日本(国)」よりも、前の文の主語「(日本語を学ぶ)人」との関連がより強く、因果関係がより明確であることから、前の文に接続させた方がより自然な文脈となる。また、「なぜなら (เพราะ/phrə/)」で始まる従属節の後の文が主節であるとすれば、主節内に「であるので (จึง/cung/)」という対応語が入ることが多いが、後方の文には、この語が入っていないことも前方の節を主節であるとする判断材料のひとつになりうる。

例 14 เธอได้รับรางวัลการประกวดภาพ “ฉันรักต้นไม้” ฉันขอแสดงความยินดีกับเธอด้วย⁶⁾

/thəə/ /dâiráp/ /raangwan/ /kaanprakùat/ /phâap/ “/chán/ /rák/ /tônmaai/” /chán/ /khǒw/ /sadɛng/ /khwaamyindii/ /kàp/ /thəə/

〈君〉〈受け取る〉〈賞〉〈コンクール〉〈絵画〉 “〈僕〉〈愛する〉〈木〉” 〈僕〉〈～させてください〉〈示す〉〈喜び〉〈～と〉〈君〉

誤答：→ 君は絵画コンクールで受賞した。「僕は木が大好きだ。」おめでとう。

正答：→ 君は「僕は木が大好きだ」（というテーマの）絵画コンクールで受賞した。おめでとう。

例 15 แรกๆมีคนสนใจเรียน (ภาษาญี่ปุ่น) กันมาก เพราะใครรู้ภาษาญี่ปุ่น หางานทำสะดวกญี่ปุ่นจ้างเข้าทำงานได้เงินเดือนแพงๆ ญี่ปุ่นยังพยายามติดต่อขอร้องให้กระทรวงศึกษาธิการของไทยเปิดการสอนภาษาญี่ปุ่นขึ้นในโรงเรียนแทนภาษาอังกฤษ⁷⁾

/rêek rêek/ /mii/ /khon/ /sǒncai/ /rian/ / (phaasaa yîipùn) / /kan/ /mâak/

/phró/ /khrai/ /rúu/ /phaasaa yîipùn/ /hǎa/ /gaan/ /tham/ /saduak/ /yîipùn/ /câang/ /khâo/ /thamgaan/ /dai/ /gǎn dǔan/ /phɛng phɛng/

/yîipùn/ /yang/ /phayayaam/ /tittòw/ /khǒw róong/ /hài/ /krasuang sǔksǎathikaan/ /khǒong/ /thai/ /pèəw/ /kaansǒn/ /phaasaa yîipùn/ /khǔn/ /nai/ /roongrien/ /thɛn/ /phaasaa انگريت/

〈当初〉〈ある〉〈人〉〈興味を持つ〉〈勉強する〉〈日本語〉〈～しあう〉〈多く〉

〈なぜなら〉〈誰〉〈知る〉〈日本語〉〈探す〉〈仕事〉〈する〉〈便利に〉〈日本〉〈雇う〉〈入る〉〈働く〉〈得る〉〈月給〉〈高い〉

〈日本〉〈まだ〉〈努力する〉〈連絡する〉〈要求する〉〈～させる〉〈教育省〉〈～の〉〈タイ〉〈開く〉〈授業〉〈日本語〉〈上げる〉〈～内で〉〈学校〉〈～の代わりに〉〈英語〉

誤答：→ 当初は、多くの人が（日本語）学習に興味を示した。日本語ができる者は誰でも仕事が容易に見つかり日本が雇い入れることで高い月給が得られたため、日本はなおタイの教育省に連絡をとり続けて、学校において英語に代えて日本語授業を開設するように要求したのである。

正答：→ 当初は、多くの人が（日本語）学習に興味を示した。なぜなら日本語ができる者は誰でも仕事が容易に見つかり日本が雇い入れることで高い月給が得られたからである。日本はそれでもタイの教育省に連絡をとり続けて、学校において英語に代えて日本語授業を開設するように要求したのである。

(4) まとめ

以上、タイ文読解時の語彙力と文法的知識の応用について、誤答例を挙げながら観察してきた。まず、単語の区切りについての誤解が致命的な誤答を生むことを観察した。単語の区切りさえ間違えなければ、単語の区切りを間違える以上に大きな過ちを犯す可能性は概して低いといえた。単語の区切りを正確に読み取るためには、第一に基本的な語彙力を身につける必要がある。そのためには、市販のタイ語単語集などによって日頃から語彙力を鍛えておくのが望ましい。また、文法的知識を確実に応用することにより、単語の文法的位置付けを確認し、単語の区切りと意味について読み取ることもできるようになる。そうした語彙力と文法的知識に加えて、論理性と一般常識を判断材料にすることにより、よりの確にタイ文の意味を把握することが可能になっていく。これら語彙力・文法的知識・論理性・一般常識を、確実に道具として使いこなし、タイ語テキスト受信の実践の場で応用できるように準備しておくことが重要である。

また、タイ文に臨んだ際には、安易に解答を出すのではなく、真摯に熟考しながらその意味を解釈していくならば、その作業自体を「謎解き」として楽しめるし、語彙力や文法力も確実に増加していくものである。その解釈に向けた真剣さの度合が、そのまま将来のタイ語力を左右することになるともいえるのである。

2 読解上の前提条件としての基礎知識・常識

さて、上述のように、タイ文の読解にあたっては、語彙力および文法的知識の裏付けが必要であるが、これらはタイ文読解上の必要条件ではあっても十分条件ではない。異文化とのコミュニケーションの際には、現代日本の一般生活では必ずしも必要とはされていないかもしれないが当該地域の一般生活では必要不可欠な、「常識」の体系が必要とされるからである。音声言語を経由するにせよ文字言語を経由するにせよ、異文化をもつ他者とのコミュニケーションに必要なのは、相手の前提常識を理解しようとする柔軟性である⁸⁾。とくに最近の20歳前後の学習者に見られる「常識」体系の不足の中で、最も理解不足が目立つのは、(1) 国王・王制に関する理解、(2) 仏教に関する理解、(3) 軍事に関する理解の3点である。以下、誤答例を挙げながら、タイ語文には頻出しながらも、日本人学習者が無視あるいは誤解しがちなタイ側の「常識」について観察し、その対策を考えてみたい。

(1) 国王・王制に関する理解

タイは立憲君主制の国家である。毎日のニュースでは、どのテレビ局においても必ず王室関連ニュースのコーナーがあり、王室の成員のいずれかがテレビ映像として流布される。王室成員による地方視察の機会も多い。また、国立大学の卒業式では、必ず国王もしくは王子・

王女が、卒業生全員に一人ひとり手ずから卒業証書を授与する。王室の関連する儀礼も、王宮外で実施される場合も多く、一般市民でも王室成員を直視する機会が多い。また、タイの国家原理とされる「ラック・タイ」においても、「国王」は「宗教」・「民族」と並んで国体における根本的地位を占め、国民統合の中心的存在であるため⁹⁾、国王は教育の中でも重要な位置付けにありタイの国語・社会・道徳などの教科書に頻繁に登場する。したがって、タイ国民にとっては、国王や王室関連の話題は、きわめて身近である。しかし、20歳前後の日本人学習者にとっては、王室・皇室関連の話題は必ずしも身近ではない¹⁰⁾。タイ語では、「王語」と呼ばれる王室関係の事物を表現するための特殊な語彙群が存在し、王室関連のテキストではこの「王語」が多用されるが、日本人学習者にとっては王室や皇室に対する日本語の特殊語彙はきわめて馴染みの薄いものである。このギャップにより、日本人学習者にとってタイ日辞典中の日本語の訳語・説明自体が理解不能な事例が出現する。たとえば、例16は、履修生が「ダイギョシン」と発音したものである。タイ日辞典において「大御心」とあるものをそのまま写しはしたが、「心」であることは理解したので「大御心」についてはそれで理解したとして放置したわけである¹¹⁾。例17は、日本人学生にとって、日本語訳語の読みだけでなく意味も不明であると判断される例である。こうした場合にも、もう一手間かけて国語辞典や漢和辞典を調べてみれば、意味も読みも明らかになるはずであるが、その努力を出し惜しみしてしまうわけである。

例18は、小学校5年生の国語教科書からの抜粋であるが、王室関連の語彙が並んでいる。王室関連の語彙の特徴を把握しておく、その特定が容易となり文意を理解する際の助けとなる。「王語」には、“พระ /phrá/” という接頭辞をとるものが多いのも、特定に役立つひとつの特徴である。

また、国王・王族の名前については例4に示したが、例19に列挙したように国王を意味する語彙も多様に富んでいる。こうした語彙に慣れておくと、読解がスムーズになる¹²⁾。

このような「王語」は、神にも適用されるため神話にも多く用いられる。タイの古典文学は、神や王室に関連した内容のものが大部分であるため、神話や古典文学に親しむためにも、こうした「王語」を解釈できるようにしておくことは重要である。

例16 พระราชหฤทัย

/phráráatchahàrúthai/

大御心

例17 พระบารมี

/phrábaaramii/

御稜威

- 例18 ตามพระราชดำรัสในพระบาทสมเด็จพระเจ้าอยู่หัวที่ได้พระราชทานแก่คนไทย
 /taam/ /phráráatchadamrát/ /nai/ /phrábàatsǒmdètphrácâoyùuhùá/ /thí/ /dái/
 /phráráatchathaan/ /kɛ̀/ /khon thai/
 タイ国民に賜った国王陛下のお言葉にしたがって

- 例19 พระมหากษัตริย์, พระเจ้าแผ่นดิน, สมเด็จพระเจ้าอยู่หัว, ในหลวง, ...
 /phrámahākāsàt/, /phrácâophè̄ndin/, /sǒmdètphrácâoyùuhùá/, /naiŭang/
 「偉大なるクシャトリア」, 「国土の王」, 「頭にいます国王陛下」, 「陛下」など

タイ語の王室関連語彙の特徴を把握しておくことに並んで、日常から日本語の尊敬語や皇室関連語彙に慣れておくことがスムーズなタイ文読解につながるであろう。

(2) 仏教に関する理解

統計によれば、タイ国民の約95%が仏教徒であるといわれる。憲法には、国王が仏教徒であるべきことが規定されている¹³⁾。タイの観光地の多くは、自然景観でなければ、仏教寺院である。人々は「霊験あらたかな」仏像に拝礼して一時を過ごす。仏教寺院は祭礼の場としても使用される。寺院の敷地において、移動映画が上映されたり、芝居が催されたり、芸能スターの歌謡ショーが実施されたりもする。新聞・ニュースにも仏教関係の記事・広告は頻出する。このように、仏教関連の話題も、タイにおいては身近なものである。一方、日本では、「宗教」に対する印象は必ずしもよいものばかりではなく、そうした話題を積極的に避ける傾向にある。多くの日本人は、仏教式に葬式を実施し、仏教寺院に墓をもちながらも、仏教に対する基礎知識は一般に貧困である。

たとえば仏暦の説明をする際に、仏暦基点について学習者に質問してみると、もっとも頻出する回答は「仏陀の生誕」である。これは、キリストの生誕を基点とする西暦基点からの連想である。実は、仏暦の基点は、仏陀が「涅槃」に入った時点ということになっている。しかし20歳前後の一般的日本人学生は、仏伝については「涅槃」も「初転法輪」も成道の故事も、仏陀の誕生の故事も、予備知識として蓄積されていない。したがって、仏暦の説明をする際には、時として仏陀の一生を誕生の場面から語る必要が生じるのである。

仏伝や、仏陀の前世を描いた本生譚（ジャータカ）は、タイにおいても多くの芸術作品に反映されているし¹⁴⁾、地名などの固有名詞にもそうした故事に由来するものが多い。バンコク都内の大公園「ルンピニー苑」の名称も、仏誕地名に由来している。「総合タイ語」履修者とスコータイ遺跡群を訪れた際、仏塔や仏舎利についての係員の方の説明を訊したところ、実は「仏舎利」という日本語訳語が日本人学生に通じていなかったことがわかって驚いたことがある（例20）。こうした知識は、本来的には学校で習うものではない。幼年期に周囲の年

長者から聞いたり、本で読んだりして自然に身につけていくものである。もし大学入学後もこうした基礎知識が身につけていないのならば、必要に応じて積極的に読書し、あるいは研究して、基礎知識を身につけておかねばならない。タイのことを知るためには、仏教についての事項は避けて通ることができない。母語の予備知識がないものを、外国語で学ぶのは容易ではない。少なくとも基本的知識は、まず母語で学習しておいた方が効率がよい。タイのことをタイ語で学ぶ前に、まずは日本語で仏教の基礎知識を学んでおくことが必要である。

例20 พระบรมสารีริกธาตุ

/phráborommásáariikkatháat/

仏舎利（仏陀の骨）

(3) 軍事に関する理解

軍事に関する基礎知識も、20歳前後の日本人に共通して欠落している。タイでは、選択徴兵制がしかれ、また中等教育以上の男子生徒については徴兵免除の特典と引き換えに軍事教練がなされており、軍事に対する理解は日本に比べればより普及している。人口は日本の約半分であるのに対して、現役軍人数も日本における自衛官数とほぼ同規模である。国王や王妃、王子・王女は軍の階級を持ち¹⁵⁾、第2王女は陸軍士官学校教官、第3王女は空軍士官学校教官をも勤める。陸海空警察の各士官学校およびその予科は、難関国立大学・高校と並んでその難易度と人気を誇っている。

こうした状況の中、タイ文に頻出するのは、軍の階級呼称である。タイでは、肩書きが重要であり、一般に軍人をはじめ公務員は「公僕」というよりは「国王に仕える役人」としての意識が強いため、階級や役職の使用は名誉である。警察は軍と同様の階級呼称を持ち、文官もその階級は軍の階級と並行している¹⁶⁾。軍・警察の階級は退役後も生涯保持され正式な呼称となる。たとえば、歴代の総理大臣の多くが軍・警察の出身であり、その場合には新聞記事においても階級呼称が付せられる。例21は、最近3代の歴代首相の氏名を、新聞記事から抜粋して示したものである。2代前の首相は陸軍出身、現首相は警察出身であり、弁護士出身のチュワン前首相以外には階級呼称が付く。学術論文においても著者氏名の前に例22のような肩書きが付けられる場合がある。したがって、ニュース、新聞記事、テレビ・ドラマ、小説など、軍の階級呼称は頻繁に登場する。こうした事情から、階級呼称はタイ国民にとっては一般に身近なものである。しかし、日本人学生は、その階級の日本語訳語は辞書を調べられるものの、その階級の位置付けも意味も、ほとんど理解できない。

例21 พล.อ.ชวลิต ยงใจยุทธ นายชวน หลีกภัย พ.ต.ท.ทักษิณ ชินวัตร

/phon èek chawalít yongcaiyút/ /naai chuan liikphai/ /phan tamrùat thoo tháksĭn chináwát/

チャワリット・ヨンチャイユット陸軍大将, チュワン・リークパイ氏, タクシン・チ
ナワット警察中佐

例22 วิชา.ดร.จ.ต.อ.ม.จ.ว....

準教授・博士・警察大尉・mom・ラーチャウオン (王族の階級の一つ)……

また、同様に部隊名称・規模も日本人学生にとっては理解に苦しむものである。たとえば、例23, 24は、教材として用いた新聞記事に登場した語であるが、脱獄囚逮捕のための支援に派遣された部隊を指す以下の語を、履修者はまったく理解していなかった。例23は、訳語は正しかったものの、履修者全員が「師団」を「教師の集団」であると考えていた。本人たちは、当然のことながら、なぜ教師の集団が凶悪犯逮捕に駆り出されたのか理解できなかったという。例24は、逐語直訳によって意味不明になった例である¹⁷⁾。逐語の訳語は確かに正しいかもしれないが、外国語の理解に努めるには、言語的側面からの理解だけでは不十分である。この例でも見られるように、正確な理解を心掛けるには、常にその社会・文化において「常識」とされる社会的・文化的背景への理解が要求されているのである。異文化とのコミュニケーションの最前線に立とうとする学習者には、ぜひ、そうした背景にいたるまでの理解を試みてほしいと思う。

例23 กองพล

/koongphon/

誤答：師団 (教師の集団)

正答：師団

例24 พลร่ม

/phon/ /rôm/

〈軍勢〉〈傘〉

誤答：→ 傘兵

正答：→ 空挺部隊

おわりに

以上、日本人タイ語学習者が応用レベルにおいて直面する諸問題を、とくに誤答が多いタイ文読解の解答例を中心に観察してきた。

まず、タイ文読解時の語彙力と文法的知識の応用について言及した。誤答が多かったのは、

(1)単語の区切り, (2)語義の確定, (3)説・文の区切りの3点であった。とくに単語の区切りを誤ると、致命的な誤答を生むことを述べた。こうした問題点に対する対策としては、(a)タイ語単語集などを用いた語彙力の向上, (b)文法知識の復習, (c)積極的読書による一般常識の涵養, (d)論理的に熟考する態度の育成といった4点が有効であろう。とくに、意味が通じないままに文意の追求を諦めてしまう態度は、総合的タイ語力の向上にとって最悪である。苦しみながらも文意を追求していけば、必ず語彙力も文法知識も上昇し、総合的タイ語力は向上していく。謎解きの楽しさも味わえるようになるはずである。

また、タイ語を読解する上で、タイ語話者にとっては身近な話題でありながら日本人にとっては必ずしも身近ではない諸点について、誤答例を挙げながら指摘した。異文化と接する際にも、まずは自文化についての知識が必要であることを忘れてはいけない。母語の感覚を研ぎ澄まし、母語の語彙を豊富にしておくことも重要である。また、異文化コミュニケーションを実施するには、相手の「常識」を理解しようとする努力が必要である。言語的側面だけでは、異文化コミュニケーションは成立しない。異文化コミュニケーションを成立させるには、かならず相手の文化的・社会的背景の理解を試みる努力もしなければならない。言語的側面の能力と、文化的・社会的背景への理解努力が車の両輪となって、はじめて実り多い異文化間コミュニケーションへの旅が可能となるのである。

注

- 1) 本稿は、『文明21』誌上の特集「日本人が間違えやすい外国語シリーズ」の一環である一宮孝子氏「タイ語学習上の困難」『文明21』7, 2001に刺激されて記述したものである。一宮論文が主にタイ語初級学習者に焦点を当てているのに対して、本稿は主にタイ語中級学習者に焦点を当てている。タイ語理解のためには、あわせて一宮論文を参照されたい。
- 2) ทักษิณ บุญญาไทย ท่องเที่ยวไทยไป 5 ภาค กรุงเทพฯ: สำนักพิมพ์โปรเอสเอ็มอี 2544. p. 12.
- 3) 欽賜名 (ราชทินนาม : rāatchathinnanaam) とは、官職に応じて国王から下賜される名のことである。通常、官等 (บรรดาศักดิ์ : bandaasāk) とあわせて用いられる。官等や官職が変われば、欽賜名も変化する。1932年立憲革命後、こうした官等名・欽賜名が与えられることはなくなった。
- 4) ทักษิณ บุญญาไทย ท่องเที่ยวไทยไป 5 ภาค กรุงเทพฯ: สำนักพิมพ์โปรเอสเอ็มอี 2544. p. 16.
- 5) 句や単語の境界にスペースが入る場合もある。こうしたスペースは、節や文の境界を示すスペースより通常は短い。
- 6) หนังสือเรียนภาษาไทย ชั้นประถมศึกษาปีที่ 3 เล่ม 1 กรุงเทพฯ: องค์การคำของคุรุสภา 2540. p. 51.
- 7) สังข์ พันโนทัย ความนึกในกรงขัง. พระนคร: สำนักพิมพ์คลังวิทยา. 2499. pp. 412-413.
- 8) これは、国際的コミュニケーションの場にとどまらない。たとえば世代間やジェンダー間のコミュニケーションでも、場合によって必要とされる態度である。
- 9) この位置は、タイ国旗に象徴的に表象される。タイ国旗は中央に青、青の上下に白、そのさらに外側に赤が並ぶ、横縞の三色旗であるが、中央の青は「国王」を、その外側の白は「宗教」を、最

- 外側の赤は「民族」を象徴するとされる。
- 10) 時折、関心が集中することもある。たとえば、皇室の婚姻や出産に際しては、マスコミでも多く取り上げられるため、20歳前後の日本人の関心も皇室関係の話題に集中することがある。しかし、こうした現象は通常きわめて短期間のものであり、持続するものではない。
 - 11) 同様に、「御名御璽」といった日本語も、20歳前後の日本人学生には読解不能である。
 - 12) これらの語彙の中で、「偉大なるクシャトリア」については学生の理解が比較的容易である。「クシャトリア」については大学入試等の「世界史」の受験に備えて記憶した経験があるからである。こうした状況は、学生との雑談でも頻繁に観察される。たとえば、学生は「東海道中膝栗毛」の作者が「二葉亭四迷だったか十返舎一九だったか」であることは知っていても、「弥次さん・喜多さん」は知らない。受験知識として暗記はしても、その内容が付け焼刃であるために、時代背景も異なる二葉亭四迷と十返舎一九との区別すらつかなくなり、「東海道中膝栗毛」という書名を暗記しても、一度も読んだことも手に取ったことも、あるいはその内容を聞いたこともないのである。
 - 13) 仏暦2540年(1997年) 憲法第9条
 - 14) この点では、キリストの生涯についての基礎知識がなければ、多くの西洋美術の意味が理解できないと同様である。本学部では、欧米への学生旅行も多く、美術館もその大きな眼目のひとつになっているが、聖書やキリスト教についての基礎知識は、仏教知識同様に、学生には一般に普及していないことは残念なことである。
 - 15) 憲法上、軍の統帥権は国王にあり、国王は不可侵の存在である。
 - 16) このため、全省庁の行政官はもちろん、国会議員、教員、村長などの文官も、それぞれ制服があり階級章を着用しなければならない。
 - 17) 和訳担当学生本人は「傘兵」をどのようにイメージしていたのか、興味深い。

例文引用文献

例文の引用については、タイ語読解用資料として授業で利用するもののうち、以下の文献を用いた。一般的な文については、とくに引用箇所を示さなかった。

- ・ ทักษิณ ปัญญาไทย ท่องเที่ยวไทยไป 5 ภาค กรุงเทพฯ: สำนักพิมพ์โปรเอสเอ็มอี 2544
- ・ สังข์ พิธโนทัย ความนึกในกรุงขัง. พระนคร: สำนักพิมพ์คัลังวิทยา 2499
- ・ หนังสือเรียนภาษาไทย ชั้นประถมศึกษาปีที่ 3 เล่ม 1 กรุงเทพฯ: องค์การค้าของคุรุสภา 2540
- ・ หนังสือเรียนภาษาไทย ชั้นประถมศึกษาปีที่ 5 เล่ม 1 กรุงเทพฯ: องค์การค้าของคุรุสภา 2540
- ・ 日刊紙 ไทยรัฐ
- ・ 週刊紙 มติชนสุดสัปดาห์

参考文献

- 一宮孝子「タイ語学習上の困難」『文明21』7、2001
 富田竹二郎編『タイ日大辞典』めこん、1997
 三谷恭之「タイ語」亀井孝ほか編『言語学大辞典 第2巻 世界言語編(中)』三省堂、1989